

# 民主「政治主導」の原点は松下圭一氏の理論



## 「真の政治主導」とは何か〈2〉

石田真敏衆議院議員

### 現場の意見を聞かず 一部の人たちで政策決定

民主党が行っている政治主導は一部の人間だけで政策を決めており、幅広い議論ができていない可能性があまりあります。例えば、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の25%削減や八ッ場ダムの問題も、さまざまな議論や現場の意見を聞いて判断したわけではありません。最近では、馬淵澄夫国交大臣がダム中止撤回を表明しましたが、官房長官や幹事長のコメントによれば、内閣の方針でも党の方針でもないとのこと。まさしく一部の人の発言や思いつきを、プロセスを無視して進めています。

また、事務次官会議の廃止や政務三役の会議から官僚を締め出したことで、霞が関では情報過疎になっていると指摘



中国漁船衝突事件とその後の日中関係の悪化は民主党政権の誤った政治主導の結果だ（YouTubeから）

素人の政務三役だけで判断を重ねることが

菅総理の著書から引用すると、「今回の政権交代では『三権分立』を盾にした霞が関の

政治主導と聞いている、そのことが今日の民主主義の失敗の本質です。政と官に上下関係を持ち込み、官僚を萎縮させている現状は誤った政治主導です。

さらに民主党は「政治主導」の名のもと、いくつかの改革を進めています。たとえば「国会改革」で

### 英国でも見直される 政府・与党の一元化

党「政治主導」の在り方検証・検討プロジェクトチームでは、憲法を軽んじ、議論なく一方的に進められる「民主

党の政治主導」は一体、何に由来するのかを検討しました。その結果、浮き上がったのが法政大学教授を長く務めた政治学者、松下圭一氏の「国会内閣制」理論です。同氏の理論は昭和40、50年代の革新

自治体に影響を与えました。菅直人総理は著書で「松下理論を現実の政治の場で実践することが私の基本スタンス」と述べ、所信表明でも松下理論に触れました。また、仙谷由人官房長官も座右の書に挙げ、松下理論は「地域主権」や「新しい公共」などの民主

党政策にも強い影響を与えています。

は、内閣法制局長官の答弁を禁止し、閣僚が答弁するとしています。しかし、法制局長官は準司法的な性格を持っており、答弁禁止となると憲法解釈が政治的判断で安易に変えられてしまう恐れがあります。同様に官僚の答弁も廃止を目指していますが、質問する側に任せるべき事柄で、政府が判断するものではありません。

「政府・与党一元化」では陳情一元化を進めています。しかし陳情の制限は、公務員の中立性や請願権など憲法の定めや趣旨に反しています。

従来憲法解釈を根本から覆し、国民主権の原則に則した内閣を構成しつつある。（中略）大臣以外の国会議員には『行政に介入』しないことが三権分立だとし、『官僚内閣制』の理論的根拠としてきた。しかし、現行憲法の原則は『国民主権』であり、三権分立の規定はどこにもない。（中略）国会が内閣をつくる（さらに国会で多数を得た政権党が全責任を持つ）その党のリーダーを総理とする内閣をつくるのが、『国会内閣制』と述べ、政府・与党一元化の根拠としています。

ここが民主主義の「誤った政治主導」の原点です。民主主義が政府・与党一元化の手法とする英国議会制度とは、似て非なるものです。そもそも、単純な比較が難しいばかりか、英国ではそのモデル自体が見直されている最中です。

よくわかる

## 保守主義入門

〈59〉

東洋学園大学准教授 櫻田 淳

### 保守政治家の肖像Ⅳ

吉田 茂 ⑤

吉田茂は、幼くして養父が遺した財産を相続し、経済上は何の心配もない環境で成長した。そして、吉田は、外交官に任じた後では、結婚を機に近代日本の重臣層の系譜に連なった。しかしながら、戦後の吉田の政治指導に漂う「野趣」は、そうした恵まれた環境には似つかわしくないものである。それは、たとえば近衛文麿や幣原喜重郎と比べれば、明らかな対照を成している。ただし、吉田における「野趣」こそは、彼が戦後に大事を成し得た所以であった。

### 力量を反映した吉田の「野趣」

そもそも、ハンナ・アレント（政治思想家）に従えば、政治の前提とは、「多様性」であり、政治という営みの趣旨は、「異質な他者」との多様な関係を紡ぎ、それを切り回すことにある。吉田が外交官生活の大半を送った中国や当時の満州植民地は、現地の中国人や満州人だけではなく、日本から進出してきた軍部や他の行政部門、さらには新興財閥や大陸浪人といったように、吉田の信条や価値基準からすれば、明らかに「異質な他者」に他ならない人々が入り乱れる土地柄であった。当然のことながら、そうした魍魎魍魎が跋扈する環境下で日本の権益を維持するには、「異質な他者」との遣り取りに疲れることのない「力量」が必要とされる。吉田における「野趣」とは、その「力量」が反映されたものであった。

戦後、吉田は、池田勇人、佐藤栄作、愛知揆一、大橋武夫といった人材を官界から発掘し、彼らは、吉田の「権力基盤」を支えた。しかし、吉田は、その執政に際しては、官界以外の経路を適切に利

用した。白洲次郎や辰巳栄一の名前は、宰相としての吉田の軌跡を語る折には、その「黒子」として頻りに言及されるものであろう。

加えて、吉田は、第1次内閣の折には和田博雄を農林大臣に起用して、第2次農地改革を断行した。和田は、後に左派社会党書記長や社会党副委員長を歴任した。吉田は、政治信条からすれば明々白々たる「異質な他者」である和田を重用したのである。因みに、吉田は、和田の同志にして後に社会党委員長となった勝間田清一にも、「過日ハ御来訪被下又御書御寄し被下難有奉存候」と記された書簡を送り、その文面からは、吉田と勝間田の交流の様子が浮かび上がる。吉田は、「異質な他者」を自ら排除しなかったのである。

### 「異質な他者」に向き合う

然るに、保守主義思潮が対峙してきたフランス革命期やロシア革命期の革命思潮には、「異質な他者」の共存や妥協という発想はない。革命体制の下では、「異質な他者」はその存在を否定され、それは「粛清」と「総括」の対象となる。フランス革命の標語は「自由・平等・博愛」の中の「博愛」とは、本来は、同志の「輪」の内に対してだけの連帯を意味するのであって、それは「輪」の外には及ばない。故に、「輪」の外の人々には、仮借ない弾圧や迫害が加えられる。20世紀以降、ソヴェト連邦、中国、さらにはカンボジアといった国々で再現されたのは、その「異質な他者」が排除される阿鼻叫喚の風景であった。そこには、アレントが想起した意味での「政治」は、成立しないのである。

吉田が源流となった戦後保守政治の特色は、「イデオロギー」の趣を消した点にある。後年の日本が「最も成功した社会主義国家」と揶揄された事実は、その意味を物語っている。多様な「異質な他者」の利害に向き合うという実践的な要請の前には、空疎な「イデオロギー」には出る幕がなかった。故に、戦後保守政治の命脈を保つのも、「異質な他者」に絶えず向き合う際の「野趣」である。そして、それが、吉田の遺した教訓の一つである。

## 「イデオロギー」の趣を消した戦後保守政治